

座 長 峯岸久枝
原田 淳

13:00～13:20	S61	都立商業高校生のSocial Capitalの変化が学校生活に及ぼす影響—高校入学時からの参与観察を通して—	峯岸久枝	東京都教職員
13:25～13:45	S62	小学生の人間関係形成・社会形成能力育成と学習意欲の関係	○ 古澤正雄 松井賢二	新潟大学大学院教育学研究科 新潟大学教育学部
13:50～14:10	S63	中学校における部活動指導内容に関する研究—キャリア教育の「基礎的・汎用的能力」育成を視点として—	川端浩嗣	上越教育大学大学院
14:15～14:35	S64	若手研究者に対するストレス・マネジメント教育の実践報告—バイオフィードバック法とマインドフルネスによるストレス対処の実施例—	原田 淳	県立広島大学 総合教育センター

都立商業高校生の Social Capital の変化が学校生活に及ぼす影響

—高校入学時からの参与観察を通して—

峯岸 久枝
(東京都教職員)

1. 問題の所在

本研究は、都立商業高校生の社会関係資本 (Social Capital、以下 SC) が変容する過程と、学校生活の定着に影響を与える要因を明らかにするものである。一般的にいわれる「専門高校生」と、筆者が教員として関わっている商業高校の生徒には、大きな差異があると感じるからである。また、「専門高校」が評価されることはあっても、生徒(以下、彼らとする)の生活の様相を見ていると、学校が居心地のよい場所になっているとは考えにくいからでもある。

そこで、このような実態を検証するために、彼らの意識が学校に向かなくさせる SC の内実を彼らの意識の実態に基づいて明らかにしようとした。

2. 研究の目的

これまでの研究は、2つの面(高校中退と学校定着に与える影響)から、4つの分野で語られてきた。それは、学校定着の裏面としての「高校中退」率が「学校生活・学業不適応」を理由にして専門高校で高いこと、「生徒文化」が学校不適応を引き起こすことがあること、「専門高校の学校文化」は東京大学教育学部ほか(2008)の研究結果としての専門高校の評価を検証する必要があること、「進路指導・キャリア教育」が行われていても高校1年生からの時系列に沿って分析した研究は存在していないことである。

そこで、本研究では、高校生が置かれている状況(SC)に着目し、学校定着に影響を及ぼすと考えられる SC を具体的に捉え、高校生を取り巻く SC の概要と学校生活との関係について、また商業高校生に特有の SC が与える影響について考察する。

3. 調査概要

本研究では、量的調査と質的調査を融合させて調査を行った。両方向のアプローチを融合させることによって、これまであまり注目されてこなかった高校1年生から高校2年生にわたる SC の変化、「専門高校」として括るわけにはいかない商業高校の独自性を踏まえた生徒の内実、さらには学校定着と高校中退の要因等について、実態をもとに言及することを目的とした。概要は以下の通りである。

量的な調査は、高校1年生から2年生までの200名を質問紙によるパネル調査を行った。一方、量的な調査は、調査対象を筆者が担任として継続的な関わりがある生徒12名とし、SCの変化に焦点を当てるためのフィールド調査である。調査時期は、いずれも2010年4月の入学時から2011年12月である。

なお分析結果は、調査ごとに別々に記述するのではなく、量的調査・質的調査の双方を関連させながら記述した。

4. 分析結果

彼らの生活環境の変化に、学校内外の SC の変化が影響していることから、彼らの SC を5つに分類した。

(1)「夢中になれること」がある場合

学校の諸場面の活動を通して、彼らが学校という用意された枠に自らをチューニングしていく過程に迫った。その背景に、彼らの友だちとヨコのつながりが作用していた。

(2)「学校内外のつながり」が影響する場合

彼らが「外の顔」として築いている親以外のつながりに着目し、学校外のソーシャル・ネットワークの強弱や、学校内の友だちとのヨコの関係が、学校生活感や学校定着度(感)に影響を与えていた

小学生の人間関係形成・社会形成能力育成と学習意欲の関係

○古澤 正雄
(新潟大学大学院教育学研究科)

松井 賢二
(新潟大学教育学部)

1 問題と目的

文部科学省は、コミュニケーション教育推進会議審議経過報告(2011)の中で、「子どもたちは気の合う集団の中でのみコミュニケーションをとる傾向が見られ、また、コミュニケーションをとっているつもりが、実際は自分の思いを一方的に伝えているにすぎない場合が多い」と述べている。河村(2009)は、「現代の子どもたちは、家庭のしつけや地域社会における社会参加体験が減少し、様々な人々と関わる体験が減少している。その影響で、対人関係能力・共感性・道徳性・欲求不満耐性が低下している。」と言及している。

つまり、かつては家庭や地域社会で自然形成的に身に付いていた能力が、時代の変化と共に身に付けることが難しくなったと言える。そしてこれは、キャリア教育の基礎的・汎用的能力の1つである「人間関係形成・社会形成能力」が十分に育っていない子どもたちが増えていることを示しているとも言える。

この課題を解決するためには小学生からの能力育成が必要と考える。学級は子どもたちが帰属する初めての社会的集団であり、社会的自立を目指すキャリア教育の出発点と言える。集団の一員としての自覚と責任を身に付けていくことが学級生活を安心・安定したものとし、学習意欲喚起につながっていくと考える。

本研究では小学生の「学校の楽しさ」及び「学習意欲」と「人間関係形成・社会形成能力」との関係を探ると共に、能力育成に有効と考える手立てについて提案することを目的とする。

2 方法

(1) 調査対象

A市立B小学校1～6年生 106名 (男子44名 女子62名)
C市立D小学校5年生 26名 (男子14名 女子12名)
E市立F小学校6年生 40名 (男子21名 女子19名)
計172名 (男子80名 女子92名)

(2) 調査時期

- 1) 2012年4月からX県内の小学校3ヵ校8学級の協力を得て、「人間関係形成・社会形成能力」を育成する実践に取り組んだ。
- 2) 2012年5月下旬～6月初旬にかけて質問紙による調査を行った。

(3) 調査内容

- 1) Q-U (河村, 1994)

「友達関係」「学習意欲」「学級の雰囲気」「侵害行為認知」の4下位尺度21項目を4件法で回答。

- 2) ASSESS (栗原他, 2010)

「生活満足感」「教師サポート」「友人サポート」「非侵害的關係」「向社会的スキル」「学習的適応」の6下位尺度34項目を5件法で回答。

(4) 手続き

(3)の1)、2)について、「学校は楽しいですか」及び「学習意欲」の項目・尺度でt検定及び重回帰分析を行い、結果を分析した。

なお、分析では下位尺度ごとに該当する項目の得点を合計し、それを下位尺度の得点として用いた。

3 結果

(1) 「学校の楽しさ」についての分析結果

表1から、「学校の楽しさ」に性差があるかどうかを見るためにt検定を行った。その結果、有意差は見られなかった。($t(170) = -.09, ns$)

表1 あなたは、学校は楽しいですか

性別	N	M	SD
男子	80	4.58	.79
女子	92	4.58	.79

表2から、「学校の楽しさ」に影響する要因として、男女共通して「生活満足感」が有意であった。これは、「学校の楽しさ」は、家庭の状態や学校外の活動(習い事等)を含めて総合的に影響していることを示している。また、男子に特徴的に見られたものは「教師サポート」と「非侵害的關係」、女子に特徴的に見られたものは「学習意欲」であった。

中学校における部活動指導内容に関する研究

ーキャリア教育の「基礎的・汎用的能力」育成を視点としてー

川端浩嗣

(上越教育大学大学院 学校臨床研究コース)

1 問題の所在と研究の目的

部活動は、教育課程外の教育活動（＝課外活動）ではあるが、多くの中学生にとって大きな意味をもつ学校生活上の重要な場面である。実際に、部活動への参加が制度的に全員加入ではなくなったにもかかわらず、その後も9割を超える中学生が何らかの部活動に所属し活動に励んでいるという実態がある。また、部活動を通して競技力や専門性の向上を目指すなかで、社会的自立のための様々な基礎的能力や態度が培われるということについては、活動の主体である生徒たち以上に、多くの部活動経験者が認めるところであろう。

しかし、部活動が内包する問題や課題も少なくない。なかでも、学習指導要領における位置づけの曖昧さに起因する指導内容の不確かさは、専門性に関する顧問教師の指導力不足といった問題以前に、生徒にもたらされる基礎的能力や態度の育成効果に大きな差異を生じさせている。部活動を通して充実感や達成感、それらを分かち合えるかけがえのない仲間を得たという生徒が多くいる一方で、部活動内の人間関係に悩む生徒、非現実的な目標にむかって無計画に活動する生徒、勝つことのみに執着した活動の末にいわゆる燃え尽き症候群に陥ってしまう生徒等々がいることは看過することができない問題である。つまり、部活動を通して何をどう教えるべきかが各顧問教師の裁量に任されているために引き起こされる生徒たちにとっての不平等が少なからず存在している。

平成20年3月に告示された中学校学習指導要領総則編において「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」として部活動の意義が初めて明確に示され「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環

として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」との記述がなされた。しかし、部活動が実質的に課外活動であることには変わりなく制度としての裏付けや指導内容の規定がなされていないため、顧問教師への個人依存度の高さは解消されず、前述のような問題についても解決されることにはなっていない。しかも、外部指導者の活用や社会教育団体との連携が今後ますます推進されていくであろう現状を鑑みると、教育の最前線で実際に生徒たちとかかわる顧問教師にとっての指針となるべき指導内容を示し、学校が教育としての部活動の在り方について確固たる指導方針を有することが不可欠であり、喫緊の課題である。

では、部活動を通じて育成することが期待される基礎的能力や態度を指導内容として整理する際に、どのような視点が考えられるだろうか。

平成23年1月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」のなかで、キャリア教育・職業教育の基本的方向性の一つとして「基礎的・汎用的能力を確実に育成するとともに、社会・職業との関連を重視し、実践的・体験的な活動を充実すること」が挙げられている。キャリア教育で提唱されるこの「基礎的・汎用的能力」には、前述の人間関係形成にかかわる能力や、課題に対して目標や計画を立て実行する能力等を含んでいる。国立教育政策研究所「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」（2011）や文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」（2011）では、これらの能力を育成していくことの重要性を謳い、そのための指導内容を例示している。しかし、各教科や道徳、特別活動、総合的な学習の時間等を通じた実践の方向性は示されているが、教育課程外の教育活動である部活動における取り組みについては全く触れられていない。

若手研究者に対するストレス・マネジメント教育の実践報告

ーバイオフィードバック法とマインドフルネスによるストレス対処の実施例ー

原田 淳

(県立広島大学総合教育センター)

背景と目的

博士課程大学院生や博士研究員などの若手研究者は、大学や研究機関、そして、企業など社会で活躍することが期待される一方で、研究や就職に関して大きなストレスをかかえることが多い。社会で十分に能力を発揮し活躍するためには、ストレスを上手にコントロールすることが必要不可欠である。職場や地域社会で活躍する上で必要になる基礎的な力として経済産業省が定義している社会人基礎力の能力要素にもストレス・コントロール力があげられている(経済産業省 2006)。

しかし、これまで大学・大学院においては、ストレス・マネジメントに関する教育はほとんど実施されておらず、また、セミナー等が開催されてもストレスの基本的な対処法(認知を変える、休養、気分転換、相談など)が示されるにとどまっており、実践的な方法については提供されていないのが現状である。

そこで、大学院生、および、博士研究員などの若手研究者を対象として実践的なストレス・コントロール力養成を目的としたプログラムを開発し、その効果について検証を行うこととした。

方法

ストレス・マネジメント教育のプログラムは、効果が実感しやすく個人で継続可能なものとするため身体性のある内容、すなわち、バイオフィードバック法(木村, 2011)を取り入れることと、マインドフルネスの要素を含めることとした。マインドフルネスとは、「今の瞬間の現実」に常に気づきを向け、その現実をあるがままに知覚して、それに対する思考や感情にはとらわれないという心のあり方」を意味する言葉である(熊野, 2007)。マインドフルネス瞑想は臨床研究も多く、心身症や、うつ病、不安障害、睡眠障害など多くの疾患

に対して症状の軽減が認められており、第三世代の認知行動療法として注目されている(杉浦, 2008; 竹林, 2009)。

講義では、1) 心理・社会的ストレスが生じるメカニズム、2) ストレスによる生理的反応、3) 安定した心のあり方、4) ストレス・マネジメントのための行動、5) バイオフィードバック法の原理、6) ストレス・マネジメントの技法、について解説する。

実習では、Ⅰ) ブリージング・エクササイズ、Ⅱ) レジスタンス運動、Ⅲ) 呼吸法、Ⅳ) マインドフルネスに自分を観察する技法、を行う。Ⅰ) ブリージング・エクササイズは、身体の動きに同調させてゆっくりした呼吸をすることで、ゆったりした心理作用をもたらす。具体的に指導するのは、ハンド・イン・アンド・アウト・ブリージング、ハンズ・ストレッチ・ブリージング、アングル・ストレッチ・ブリージングである。Ⅱ) レジスタンス運動は、等尺性筋力トレーニングによる緊張と、その後の弛緩を意識化することにより、自律神経系の働きを整え、深い休息をもたらす。腹筋、背筋など体幹の筋肉や手足の筋肉など部位ごとのレジスタンス運動について実習する。Ⅲ) 呼吸法は、時間をかけてゆっくり息を吐ききることによって副交感神経を優位にして心身を落ち着かせる効果がある。まず、腹部に手をあてて呼吸にともなう動きを感じとり意識化することを行う。次に腹式呼吸、胸式呼吸、肩式呼吸を実習し、それらを全て用いる完全呼吸法を行う。さらに、より呼吸を意識化する効果のある片鼻交互の呼吸法も実習する。呼吸を意識化することができれば、マインドフルネスに自分を観察することが容易になる。Ⅳ) マインドフルネスに今の瞬間の自分の身体、思考、感情をありのままに観察することにより、ストレスの原因となる思考や感情に巻き込